

青年期における自己受容性の一研究*

宮 沢 秀 次¹⁾

自己概念に関する研究はこれまで莫大な量にのぼっている。その研究立場・目的はさまざまであるが、自己概念とは対象としての自己および自己の行動に対する知覚やそれに対する態度・感情・評価などをさしたものであるという点で、多くの研究者の自己概念に関する見解は一致している。そしてまた、その個人の自己概念はその個人の行動を規定するinner frame of referenceとしての重要な機能を持つということも広く認識されている。

特に、Rogers, C. & Dymond, R. (1954)がQ分類法により患者の現実自己と理想自己との関係を治療前と治療後において比較して以来、適応—不適応の問題が自己概念という面から実証的に研究されてきた。しかしながら、「自分とはどういう人間であるのか」というこの自己概念に関する問題は、疑いもなく、人生の他の時期に比して、青年期の中心の問題である。Spranger, E. (1955)の「自我の発見」、Erikson, E.H. (1963)の「identityの確立」などにいわれるように、青年期の意義は自我の覚醒にひきつづく主体的な人格形成にあるといわれている。したがって、青年期の自己概念にアプローチする際には、加藤(1960)、山田(1974)の指摘するように、単に適応理論の立場からだけでなく発達心理学的立場または青年心理学的立場からの研究および解釈が必要である。また、Carlson, R. (1965)さらにMullener, N. & Laird, J. D. (1971)、Monge, R. H. (1973)、小山田(1971)なども自己概念の内容および発達をさぐる研究の少ないことを指摘強調し、青年期の自己概念に焦点をあてた発達的研究を行っている。

これまでに自己概念を操作的に測定するため、多くのメジャーが用いられてきた。自己の属性を高く評価しているという意味のself-esteem、自己のすべてを尊厳をもって受け入れていることを意味するself-acceptance、現在の自己に対する満足の程度を意味するself-satisfaction、また現実自己と理想自己との一致度(あるいは差異ズレ)など、互いに重なり合う部分を持った概念が多少ニュアンスを異にしながら使われてきた。これらについて

て、Wylie, R. (1961)はself-regardとでも呼んで包括的に表現できるという。更にまた、Shavelson, R. J., Hubner, J. J. & Stanton, G. C. (1976)も、これまでself-descriptionとself-evaluationの区別が概念的にも、経験的にも十分なされておらず、そのためself-esteemという用語が互換的に使われていると述べている。

そこで、本研究ではCrowne, D. P. & Stephens, M. W. (1961)にしたがって、自己概念の主要な次元と考えられる自己受容性をとり上げた。Crowneらによると自己受容性は「自己評価における満足の程度」として、まとめることができるという。Combs, A. W. & Snygg, D. (1949)は自己受容性とは自己の現実の姿についての正確な観察を行い、その姿をありのままに受け入れることであるとしたが、Rogers, C. (1949)以来、その自己受容的な人の持つ評価の側面をとらえての実証的研究が行われ、自己受容性はCrowneらの述べるように、自己に対する肯定的態度をさす概念として使われている。

さて、これまでの諸研究において、自己受容性はどのように測定されたのかをみると、およそ次の3つに大別される。

(1)現実自己と理想自己との差異を自己受容性のメジャーとするもの。これにはQ分類、SD法、チェックリスト、評定尺度などが用いられている。Raimy, V. C. (1948)、Bills, R. E., Vance, E. R. & McLean, O. (1951)、Rogersら(1954)などの研究がある。

(2)チェックリストを用いたもの。これはチェックリストに用いる項目を好ましい項目と好ましくない項目とに、あらかじめ決めておいて、個人のチェック数を問題とする。すなわち、好ましい項目へのチェック数を全チェック数で除算したものを自己受容性のメジャーとしている。Gough, H. G. (1960)、加藤(1962, 1977)、Rasmussen, J. E. (1964)、Gough, H. G. & Heilbrum, A. B. (1965)などの研究がある。

(3)自己受容性の内容を各項目によって直接的に表現し、その項目への反応によって自己受容性をとらえるもの。Billsら、Phillips, E. L. (1951)、Berger, E. M. (1952)、Spivack, S. S. (1956)などの研究がある。

このような諸メジャー間の相関的關係はCrowne, D. P., Stephens, M. W. & Kelly, R. (1961)、Spitzer,

* 本研究の資料分析のための計算は、名古屋大学大型計算機センターのFACOM230-75によった。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)教育心理学専攻

S. P., Stratton, J. R., Fitzgerald, J. D. & Mach, B. K. (1966), Pedersen, D. M. (1969), Wylie, R. (1974), 川岸 (1972) などによって検討されている。これらの研究によると、先にあげたメジャーの間には予想される相関関係がみられ、同じ概念 (自己受容性) を測定しようとしたメジャーの妥当性 (convergent validity) が確認されている。

さて、Rosenberg, M. (1965) が自己概念研究の課題として、「いかなる刺激、経験、影響因がいかなる条件下で、いかなる人々に作用し、self-imageのいかなる部分に、いかなる変化をもたらすか」ということを明らかにすることであると述べている。これは先に述べたように発達心理学的あるいは青年心理学的観点から表現するなら、自己概念の形成過程および発達の変容を明らかにすることとなる。

そこで、これまで自己受容性の年齢的変容について、研究されたものはどのようなものがあるだろうか。

まず、Engel, M. (1959) は同一被験者を2年間おいてQ分類で2回測定したところ、肯定的態度の増大がみられることを示した。しかし、Carlsonは、Engelの研究の問題点すなわち自己概念をself-esteemの次元に限定していることおよび期間が2年間であることの2点を指摘して研究を行い、自己概念の次元を社会志向・個人志向の次元およびself-esteemの次元の2次元から、6年間の期間をおいて同一被験者の自己概念の発達を検討した。その結果によると、self-esteemの次元は安定していることが示された。

加藤 (1962) は先にまとめた自己受容性メジャーのチェックリストを用いる(2)によって、中学1年、高校1年2年、3年、大学1年、2年および一般の被験者について、自己受容性の変容を比較検討した。これによると、中学1年から高校1年にかけては自己受容性が減少し、高校2年から大学2年にかけては次第に自己受容性が増加する傾向のみられることを示した。そして、チェックされた項目の内容を分析し、中学生では外面的な記述内容の項目にチェック数が多いが、高校生では自己否定的な記述内容の項目や悲観的な記述内容の項目に、また大学生では落ち着きと深刻さを記述内容とする項目にチェック数の多いことを明らかにしている。更に加藤 (1977) は同様な調査を行った。その結果によると全般的に中学生がもっとも自己受容的であり、高校生、大学生においては自己受容性が低くなると、先の研究と若干異なる結果を示している。

現実自己と理想自己との差異が成熟の水準と正の相関があるというAchenbach, T. & Zigler, E. (1963)の予想をKatz, P. & Zigler, E. (1967)は評定尺度を用いて検

討した。小学5年、高校2年の被験者の現実自己と理想自己の差異を比較すると、年齢が増すにつれ、その差異は増大していくことが明らかにされた。同様に、Jergensen, E. C. & Howell, R. J. (1969)は8才から18才までの11年齢段階の被験者について、現実自己と理想自己の差異をみた。それによると、8才から12才の間では年齢が増すにつれ、その差異が増大し、12才から18才の間ではその差異はほとんど変化しないことが示された。しかし、山根 (1972)は中学2年、高校2年、大学3、4年の被験者について検討したところ、現実自己と理想自己の差異には学年差がみられないが、自己に対する評価 (肯定的に評定したが、否定的に評定したかということ)でその評価の程度を決める)については、中学2年から高校2年まで次第に自己評価が高まり高校2年から大学にかけては変化のないことを示した。

これらの研究は自己受容性の年齢的変容について検討したものであると考えられる。年齢的変容については、山根の研究を除くと中学生と大学生の間では変容がほとんどみられないか、あるいは中学生の方が大学生よりも自己受容的であるように思われる。では、そこにはどのような意味や変容内容があるのかという点になると十分に検討されていない。

McCandless, B. R. & Evans, E. D. (1973)は自己概念を発達の研究するうえで、differentiation, individuation, complexity, consistency, および, stability という5次元から考察することの必要を強調しているが、このdifferentiationに関して、Mullenerらの研究がある。Mullenerらは達成的特性、知的技能、対人的技能、身体的技能、社会的責任という自己概念の内容領域をそれぞれ8項目によって記述し、各領域の得点の分散を個人別に算出した。そして、中学1年、高校3年、夜間大学の学生それぞれ24人について比較した。その結果、年齢の増加にともない、個人別の分散は大きくなる傾向のあることを見出した。Wattenberg, W. W. & Clifford, C. (1964)は幼稚園児について、よい子か悪い子かという人間的価値に関する自己概念と能力に関する自己概念は分化していることを示した。また、Jersild, A. T., Brook, J. S. & Brook, D. W. (1978)は青年が自分自身を言い表わす時に、しばしば身体、知的特殊能力、興味・技能、風采の嗜好、学校での成績および学校に対する態度、性格、気質的特徴、社会的態度および社会的関係について、自己の特徴を言い表わすと述べている。Shavelsonらは自己概念を、全般的な自己概念のヒエラルキーから、アカデミックあるいはそれ以外の自己概念 (社会的自己概念、情緒的自己概念、身体的自己概念など)、自己概念の低位領域 (教科、仲間、重要な他者、

身体的特徴など),そして、特定状況での行動についての評価というヒエラルキーに図式化している。これらの点から、自己受容性の年齢的変容の内容について検討するひとつの手掛りが得られる。この点において北村(1977)が述べていることは参考になるので次に引用する。

「……人は普通、自己像の全体に対して、全面的に肯定か否定か、満足か不満かのどちらかの態度をとるのではなく、自己像のある側面については満足し、肯定し、別のある側面については不満を感じ、否定的であるといえよう。そこで全体の自己像のある側面は好ましい自己よい自己、または自分の強いところであると思われ、別の側面は好ましくない自己、わるい自分、または自分の弱いところと認められることになる。」

特に、青年期になると、個人は次第に自己を諸々の側面からとらえるようになる。そこで本研究では北村の考察を自己受容性の年齢的変容という点からみることによって、自己受容性の変容があるとすれば、その自己受容性の変容の内容を明らかにすることができると考えた。そこで、まず中学生と大学生の比較から、自己受容性の年齢的変容の内容を明らかにしていきたい。

1 方法

個人は自己をいろいろな側面(ここでは領域と呼ぶ)からとらえていると考えられる。そこで、吉川(1960)菊池(1969)、高垣(1974)などの20答法や自由記述を用いた研究を参考にして、自己概念の領域を設定した。これらの研究は被験者の反応をいくつかの分類カテゴリーから検討したものである。本研究では、特に青年期の問題に関連すると考えられる次の5領域とした。すなわち、生き方、対人的領域、性格、身体・容姿的領域および能力的領域である。また、自己受容性の測定メジャーは、先に述べた(3)すなわち自己受容性の内容を各項目によって直接的に表現し、それへの反応によって自己受容性をとらえることとする。

Sheerer, E. T. (1949), Rogers, C. R. (1968)の研究をみると、自己受容的な人の特徴はおよ次のようになる。

- ・自分の能力や特徴を客観的にとらえることができる。
- ・自発的で純粋であり得ることを信ずることができる。
- ・自分自身の価値や基準にもとづいて行動する。
- ・生活上の問題を処理する能力がある。
- ・自分の行動の結果に責任をもつ。
- ・他人からの称賛や批判を客観的に判断して受け入れる。
- ・他人と同じ程度には価値ある人間と自分をみている。
- ・何か失敗しても混乱したり、絶望したりしない。

・内気でなく、自意識も強くない。

これらの特徴をもとに、各領域を記述内容とする質問項目を作成した。生き方では24項目、対人的領域では21項目、性格では20項目、身体・容姿的領域では18項目、能力的領域では19項目の合計102項目である。自己受容性は臨床的知見から概念化されてきており、臨床的場面において個人が自己受容的であるか否かについて知見が深いと考えられる臨床心理学研究者と発達心理学研究者の合計7名に、次の点について判定するように依頼をした。すなわち、(1)自己受容性を測定する項目として各項目は適切であるかどうか、(2)自己受容性を測定する項目として適切ならば、その反応傾向(肯定的反応、否定的反応)はどのようなものであるのか、の2点である。この2点の判定依頼に対して、研究者7名のうちで5名以上の判定が一致した項目を有効項目とした。そして更に、記述内容が非常に似ている項目が指摘されたので、それらの項目はまとめ、項目の記述が肯定的表現と否定的表現とにおおむね折半されるように一部の項目の表現を修正した。その結果、生き方では12項目、対人的領域では11項目、性格では10項目、身体・容姿的領域では9項目、能力的領域では9項目の合計51項目が、自己受容性測定項目とされた。その質問紙(SAI)は「非常にあてはまる」、「かなりあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の5段階評定尺度から構成されている。質問項目は、領域別に、表8に示した。

被調査者は名古屋市内の2つの市立中学校の2年生および東海地区の2つの国立大学教育学部と1つの私立大学文学部の2年生である。その内訳は表1に示したとおりである。教示は中学生の場合は担任の先生に御願ひし大学生の場合は筆者が行った。調査は1977年11月、12月に行った。

表1 被調査者の内訳(人)

	男	女
中 学 (A)	69	57
(B)	92	61
合 計	161	118
大 学 (X)	19	30
(Y)	40	48
(Z)	31	36
合 計	90	109

各項目について次のように得点化した。自己受容性の肯定的記述項目には、「非常にあてはまる」を5点とし「かなりあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「まったく

あてはまらない」を1点とした。また、自己受容性の否定的記述項目については、逆に1点から5点とした。

Ⅱ 結 果

1 信頼性

SAIの信頼性は α 係数および折半法によって算出し表2に示した。折半法による信頼性係数は、51項目を前半部26項目と後半部25項目に分割し、Spearman・Brownの修正をしたものである。

表2 SAIの信頼性係数

	学 年		大 学		計	
	性	中 学	性	大 学		
α 係 数		.909	.917	.942	.929	.923
折半法による 信頼性係数		.893	.916	.933	.921	.912

表中、計の欄は学年、性を混みにしたものである。以下同様である。

表3 領域別の α 係数

領域	学 年		大 学		計	
	性	中 学	性	大 学		
生 き 方		.850	.828	.920	.869	.870
対人的領域		.682	.706	.784	.748	.718
性 格		.679 (.719)	.771 (.775)	.805 (.795)	.786 (.784)	.751 (.768)
身体・容姿 的 領 域		.437 (.490)	.520 (.580)	.599 (.640)	.732 (.727)	.558 (.595)
能力的領域		.633	.756	.681	.664	.688

表2によると、 α 係数は.909～.942であり、十分に高い。また、折半法による信頼性係数も.893～.933であり十分に高い。したがって、SAIの信頼性は高いといえる。

領域別の α 係数を示したのが表3である。表3において、性格の()内の数値は性格における項目の合計点と相関が負であった項目番号(23)を除いたときの α 係数である。同様に、身体・容姿的領域の()内の数値は項目番号(44)を除いたときの α 係数である。表3によると、生き方では.828～.920、対人的領域では.682～.784、性格では.719～.795であり、十分に信頼性はあるといえる。身体的領域では.490～.727でありやや低い。 α 係数は中学の男子が全般的に低く、大学の男子が全般的に高い。

2 各項目の平均、標準偏差および分散分析の結果

各項目の学年別、性別の平均および標準偏差を領域ご

とにまとめて、表4に示した。また、学年と性の2要因から項目ごとに分散分析を行い、その結果も表4に示した。

表4をみると、学年差のみられた項目は51項目のうち25項目である。この25項目のうちで、中学生の方が大学生よりも、より自己受容的であるのは22項目である。それとは逆に、大学生の方が中学生よりも、より自己受容的である項目は(2)他人に言ったことには責任をもつ(48)自分の気にさわることを言う友達でも許せる、および(44)自分の顔や体のことをとやかく言ってもしかたがない、のわずか3項目である。これは、中学生の方が大学生よりも自己受容的であるという加藤(1977)の研究結果とはほぼ一致している。

また表4において、性差のみられた項目は10項目である。この10項目のうちで、男子の方が女子よりも自己受容的である項目は8項目である。この結果は、小山田、川岸の研究結果とはほぼ一致する。

交互作用のみられたのは2項目だけであった。

3 各領域の平均、標準偏差、分散分析の結果および領域間相関

表4を領域からみると、生き方では12項目のうち9項目に学年差がみられる。これはすべて中学生の方が大学生よりも自己受容的であることを示している。対人的領域では11項目のうち6項目に学年差がみられる。そのうち4項目は中学生の方が大学生よりも自己受容的であることを示し、2項目は大学生の方が中学生よりも自己受容的であることを示している。性格では10項目のうち6項目に学年差がみられ、いずれも中学生の方が大学生よりも自己受容的であることを示している。ところが、能力的領域では9項目のうち4項目において、男子の方が女子よりも自己受容的であることを示している。つまり表4からみると、生き方、性格においては学年差がドミナントであり、能力的領域では性差がドミナントであるといえる。

これをよりはっきり示したのが表5である。表5は各領域の項目の得点を合計した領域の得点の平均、標準偏差および分散分析の結果を示したものである。ただし、性格では項目番号(23)と、身体・容姿的領域では項目番号(44)との得点を除いた項目の得点の合計である。表5によると、生き方、対人的領域に1%水準で学年差が、また性格に5%水準で学年差がみられ、能力的領域に1%水準で性差がみられる。これは表4の結果とはほぼ一致する。表6および表7に領域間の相関を学年別、性別に示した。領域間の相関には、ほとんど学年差も性差も認められない。領域間の相関は高い($P < .001$)。

表4 各項目の平均、標準偏差および分散分析の結果

領域	項目番号	中 学				大 学				計		性 差 男-女	学年差 中-大	交互 作用	
		男		女		男		女		M	SD				
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD				
生 き 方	1	2.80	0.86	3.01	0.96	2.88	1.06	2.73	0.91	2.84	0.94				
	6	3.64	1.06	3.45	0.99	3.32	1.07	3.18	0.99	3.42	1.05	>	*	>	**
	11	3.51	1.05	3.45	1.03	3.18	1.04	3.20	0.90	3.36	1.02			>	**
	16	2.89	1.03	2.88	0.93	2.63	1.01	2.63	0.94	2.77	0.98			>	**
	21	3.68	1.14	3.59	1.10	3.09	1.14	3.17	1.06	3.43	1.14			>	**
	26	3.09	1.12	3.14	1.12	3.04	0.96	3.05	0.84	3.08	1.03			>	**
	31	2.53	1.11	2.60	1.00	2.29	0.86	2.39	0.92	2.47	1.00			>	*
	36	3.03	1.04	2.92	1.07	2.87	0.94	2.72	0.83	2.90	0.99			>	*
	41	3.32	1.23	3.32	1.12	2.96	1.15	2.77	1.02	3.13	1.16			>	**
	46	3.48	1.03	3.43	1.10	3.07	0.96	3.17	0.84	3.32	1.00			>	**
	49	3.20	0.99	3.19	0.90	2.89	0.87	2.88	0.79	3.06	0.91			>	**
51	3.48	1.06	3.53	1.04	3.49	1.13	3.38	0.92	3.47	1.04			>	**	
対 人 的 領 域	2	3.43	0.93	3.50	0.81	3.72	0.65	3.65	0.72	3.55	0.81			<	**
	7	3.76	0.86	3.70	0.94	3.32	0.87	3.34	0.81	3.57	0.90			>	**
	12	3.94	1.09	3.90	1.05	3.16	1.12	3.13	1.11	3.60	1.15			>	**
	17	3.00	0.94	2.97	0.97	3.00	0.76	2.98	0.82	2.99	0.89			>	**
	22	3.45	1.05	3.65	1.00	3.33	0.89	3.44	0.90	3.47	0.98				
	27	3.43	1.17	3.35	1.10	3.18	1.01	3.05	1.05	3.27	1.10			>	**
	32	3.22	1.25	3.18	1.09	3.21	0.98	3.31	1.02	3.23	1.11				
	37	3.12	1.04	3.38	1.03	2.94	1.00	3.21	1.08	3.17	1.05	<	**		
	42	2.78	1.35	2.69	1.11	2.47	0.89	2.58	0.93	2.64	1.13			>	**
	48	3.09	1.17	2.71	1.17	3.12	0.92	3.15	1.02	3.02	1.10			<	*
50	3.37	1.02	3.20	1.08	3.10	0.91	3.27	0.91	3.26	1.00			<	*	
性 格	3	3.41	1.14	3.17	0.97	3.04	0.91	2.99	0.84	3.19	1.01			>	**
	8	3.26	0.98	3.30	0.93	3.32	0.97	3.39	0.86	3.32	0.94			>	**
	13	3.39	1.05	3.36	1.02	3.51	1.08	3.47	0.88	3.42	1.01				
	18	3.68	1.08	3.33	0.94	3.51	0.94	3.61	0.82	3.67	0.97			>	*
	23	3.17	1.14	2.95	1.11	2.60	0.87	2.71	0.96	2.90	1.06			>	**
	28	3.25	0.97	3.19	0.95	3.29	0.86	3.37	0.89	3.27	0.98			>	**
	33	3.43	1.22	3.25	1.06	3.13	0.93	2.96	0.96	3.22	1.08			>	**
	38	2.93	1.05	2.75	1.06	2.74	0.95	2.55	0.87	2.76	1.00	>	*	>	*
	43	3.07	1.14	3.22	1.10	2.68	1.07	2.62	0.93	2.93	1.10			>	**
47	3.30	1.08	2.98	0.96	3.12	0.90	3.08	0.81	3.14	0.96	>	*			
身 体 ・ 容 姿 的 領 域	4	3.62	1.05	3.40	1.06	3.58	0.90	3.56	0.99	3.54	1.01			>	**
	9	3.45	1.07	3.61	1.05	3.16	1.04	3.33	0.95	3.41	1.04			>	**
	14	4.02	1.02	3.43	1.07	3.71	0.88	3.45	0.98	3.69	1.03	>	**		
	19	4.03	1.24	4.03	1.06	3.61	1.13	3.90	1.03	3.92	1.14			>	**
	24	3.09	1.23	2.96	1.16	2.92	1.02	3.02	1.03	3.01	1.13				
	29	2.77	0.96	2.60	0.96	2.71	0.82	2.63	0.87	2.69	0.92				
	34	3.19	1.01	3.47	1.04	3.33	0.83	3.57	0.74	3.37	0.94	<	**		
	39	3.48	1.03	3.45	0.98	3.44	0.88	3.31	0.92	3.43	0.97				
44	3.27	1.17	3.40	1.05	3.61	0.87	3.61	0.96	3.44	1.05			<	**	
能 力 的 領 域	5	2.42	0.93	2.60	0.86	2.51	0.78	2.42	0.66	2.48	0.83				
	10	4.01	0.96	3.92	0.90	4.13	0.78	4.03	0.62	4.01	0.84				
	15	3.17	1.08	2.84	1.03	3.09	0.88	2.71	0.89	2.97	1.00	>	**		
	20	3.58	1.08	3.26	1.13	3.22	0.96	3.08	0.89	3.32	1.04	>	*	>	**
	25	3.31	0.97	3.25	0.99	3.46	0.94	3.01	0.92	3.26	0.97	>	**		
	30	3.17	1.18	2.69	1.15	2.93	1.01	2.76	0.98	2.91	1.12	>	**		
	35	3.09	0.90	3.15	0.92	3.21	0.80	3.20	0.84	3.15	0.87				
	40	3.04	1.17	2.97	1.12	2.98	1.04	2.81	1.05	2.96	1.11				
45	3.21	1.20	3.02	1.11	3.14	0.92	3.18	0.90	3.14	1.07					

表中、性差の欄の不等号は男子と女子のどちらが得点が高いのかを示す。
 同様に学年差の欄の不等号は中学生と大学生のどちらが得点が高いのかを示す。
 なお、表中*印は分散分析の結果がP<.05、**印はP<.01であることを示す。
 以下*印、**印に関しては同様である。

4 因子分析

SAIの因子的構造を検討するために、中学生と大学生を混みにして因子分析を行った。完全セントロイド法により10因子抽出し、回転を行った。まず、仮説的因子構造がある場合に用いられるプロクラステス回転を行った。これは領域と因子が対応するのかどうかをみるためであ

る。その結果は生き方と第I因子が対応する以外には、領域と因子間には対応がほとんどみられなかった。

そこで、改めて学年別、性別に完全セントロイド法により因子分析を行い、バリマックス回転を行った。この結果によると、生き方に対応する因子はすべてのグループにみられた。また、性格にゆるいながらも対応する因

表5 各領域の得点の平均と標準偏差および分散分析の結果

領域	学年・性		中 学		大 学		性差 男-女	学年差 中-大	交互作用
	男	女	M	SD	M	SD			
生き方	38.61	7.81	38.52	7.26	35.66	8.88	35.21	7.02	> **
対人的領域	36.60	5.84	36.24	5.72	34.56	5.64	35.06	5.53	> **
性 格	29.71	5.38	29.09	5.36	28.36	5.29	28.06	4.74	> *
身体・容姿的領域	27.66	4.04	26.94	4.21	26.47	4.00	26.77	4.39	
能力的領域	28.99	4.78	27.70	5.36	28.68	4.30	27.20	4.06	> **

表6 領域間の相関 (中学)

領域	生き方	対人的領域	性 格	身体・容姿的領域	能力的領域
生き方		.542	.657	.504	.617
対人的領域	.632		.503	.514	.531
性 格	.676	.692		.598	.687
身体・容姿的領域	.484	.545	.522		.586
能力的領域	.604	.680	.653	.541	

(上段は女子, 下段は男子)

表7 領域間の相関 (大学)

領域	生き方	対人的領域	性 格	身体・容姿的領域	能力的領域
生き方		.553	.643	.510	.648
対人的領域	.654		.652	.579	.622
性 格	.738	.673		.625	.733
身体・容姿的領域	.553	.579	.652		.525
能力的領域	.698	.594	.713	.546	

(上段は女子, 下段は男子)

子が中学女子と大学男子にみられた。

このように因子と領域の対応はあまりみられなかったので、因子という点から自己受容性の年齢の変容の内容を明らかにしていくために、学年と性を混みにしての因子的構造をみた。すなわち、学年と性を混みにしてまとめ、完全セントロイド法により因子分析を行いバリマックス回転をして5因子抽出した。これは全分散の35.20%にあたる。この結果を表8に示した。

表8から各因子の解釈をしておこう。

第I因子(因子寄与率は9.39%)：この因子は、精一杯に生きようとしており、また現在も時間を有意義に使って充実した心豊かな生活をしており楽しいといういわば生き方の充実性をあらわしている。領域の生き方にはほぼ対応する因子である。

第II因子(因子寄与率は8.94%)：この因子は、自分は役立たずで、つまらない性格をもち、容姿で気に入っているところはなく人前に出たくないということをあらわしている。自己卑下的で自信の欠如していることをあらわす因子といえよう。

第III因子(因子寄与率は6.98%)：この因子は、自分の性格や能力を客観的にとらえ、将来にはそれらをのばすように努力しているということをあらわしている。いわば、自己洞察、自己客観視をあらわす因子である。

第IV因子(因子寄与率は5.14%)：この因子は、顔やスタイル、能力、才能といったものにはこだわらず、悩

表8 因子分析の結果

領域	項目番号	項目	因 子					h ²
			第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	
生 き 方	1	目標に向かって毎日の生活を送っている	-.49	-.17	.42	-.08	.18	.46
	6	自分の将来に希望がもてない	.82	.44	-.04	-.07	-.12	.82
	11	毎日の生活に自信がもてない	.50	.48	.02	-.16	-.25	.58
	16	充実した生活をしている	-.62	-.17	.17	.05	.27	.52
	21	つまらない生活をしている	.57	.42	-.02	.01	-.28	.55
	26	積極的にものごとにとりくめない	.86	.84	-.27	-.14	.08	.84
	31	時間を有意義に使っていない	.54	.19	.06	-.17	.00	.86
	36	生きる力がわいてくるのを感じる	-.48	-.18	.32	-.18	.80	.48
	41	なりゆきまかせに生きている	.50	.87	-.18	-.05	.09	.42
	46	今の自分の生活は楽しい	-.56	-.11	.18	.06	.48	.58
	49	心豊かな生活をしている	-.52	-.18	.16	.18	.88	.45
51	精一杯に生きようとしている	-.60	.08	.81	-.02	.15	.47	
対 人 的 領 域	2	他人に言ったことには責任をもつ	-.17	.06	.80	.28	.05	.17
	7	人間関係はうまくいっている	-.28	-.28	.14	.27	.40	.41
	12	人とのつきあいにおくびょうである	.11	.57	-.08	-.09	-.23	.40
	17	他人を信頼できるし他人からも信頼されていると思う	-.25	-.11	.26	.29	.89	.88
	22	友達や家族との心の結びつきが深い	-.88	-.07	.11	.09	.46	.85
	27	人の言いなりになることが多い	.15	.47	-.22	-.19	.17	.86
	32	人に敵意や憎しみをもちやすい	.20	.14	.07	-.40	-.12	.24
	37	異性ともわけへだてなくつきあえる	-.05	-.24	.30	.06	.29	.24
	42	人が自分をどうみているかいつも気になる	.15	.81	.01	-.48	.19	.84
	48	自分の気にさわることを言う友達でも許せる	-.08	-.06	.08	.89	.08	.16
50	自分と違った考えの人ともわけへだてなくつきあえる	-.11	-.10	.16	.82	.27	.22	
性 格	3	自分の性格をきらいである	.20	.48	-.08	-.29	-.81	.41
	8	自分の性格をたいせつにしている	-.27	-.12	.32	.32	.82	.40
	13	自分の性格の良いところをのぼそうとしている	-.86	-.02	.50	-.00	.12	.89
	18	自分の性格の良い面も悪い面もわかっている	.01	-.18	.37	-.04	.26	.22
	28	自分の性格にはあまりこだわらない	.01	-.22	-.02	.81	.17	.17
	28	自分の性格を客観的にみることができる	.00	.02	.59	.11	-.07	.86
	33	つまらない性格の人間である	.30	.50	-.20	-.20	-.82	.52
	38	自分の性格に満足している	-.20	-.22	.21	.38	.40	.40
	43	気分が安定していない	.48	.24	-.01	-.28	-.02	.84
47	性格が良くないと思う	.18	.89	-.18	-.31	-.32	.40	
身 体 ・ 容 姿 的 領 域	4	自分の容姿のことを考えると人前に出たくない	.08	.57	-.02	-.18	-.10	.87
	9	表情が豊かである	-.09	-.22	.80	-.01	.80	.24
	14	自分の顔のことを考えるとイヤになってしまう	.01	.56	-.12	-.17	-.20	.40
	19	自分の体には異常なところがある	.28	.81	.14	-.12	-.04	.18
	24	自分の顔やスタイルにはあまりこだわっていない	-.05	-.15	.02	.49	.02	.26
	29	自分の顔や体の特徴を生かしている	-.00	-.15	.44	-.08	.20	.26
	34	自分の顔やスタイルの良い面も悪い面もわかっている	-.01	-.00	.86	-.11	.15	.16
39	自分の容姿で気に入っているところはない	.11	.55	-.26	.00	-.16	.41	
44	自分の顔や体のことをとやかく言ってもしかたがない	-.02	.21	.07	.25	.02	.11	
能 力 的 領 域	5	自分の能力を十分に使っている	-.42	-.01	.26	.18	-.02	.28
	10	自分のもっている能力や才能をたいせつにしたい	-.16	-.05	.45	.05	.09	.24
	15	自分の能力のすぐれている点をわかっている	-.09	-.16	.50	.07	.04	.29
	20	自分は役立たずだとよく感ずる	.21	.65	-.06	-.24	-.11	.54
	25	自分の能力や才能をのばすように努力している	-.47	.08	.88	.02	.09	.86
	30	自分の能力のことでよく悩む	.17	.45	.01	-.42	.06	.41
	35	自分の能力や才能を客観的にみることができる	-.11	-.01	.62	.09	-.05	.40
	40	仕事や物事の能率は悪い	.82	.86	-.17	-.28	.18	.82
45	能力や才能についてとてもこだわる	-.01	.28	.02	-.55	-.02	.85	
h ²			4.79	4.56	8.56	2.62	2.42	17.95
寄与率(%)			9.89	8.94	6.98	5.14	4.75	85.20

注：計算の便宜上、本データについては項目内容による得点の逆転はしていない。

みはせず、人のことには無頓着であることをあらわしている。物事にこだわらないおおらかさを示す因子であろう。

第Ⅴ因子(因子寄与率は4.75%)：友達や家族と心の結びつきは深く、人間関係はうまくいっており、自分の性格にも満足しており、今の生活を楽しく送っているということをこの因子はあらわしている。いわば、人との信頼関係にもとづいた楽しい生活をしていることをあらわす因子であろう。

次に、因子負荷量の高い項目の得点を合計し、学年、性の2要因から分散分析を行った。項目は表8の因子負荷量の絶対値が.40以上のものである。これらの項目にもとづいて、各因子の得点の平均、標準偏差および分散

分析の結果を示したのが表9である。

表9によると、第Ⅰ因子、第Ⅱ因子および第Ⅴ因子にもとづく得点において学年差がみられ、第Ⅱ因子にもとづく得点に性差がみられた。学年差はいずれも中学生の方が大学生よりも自己受容的であることを示しており、性差は男子の方が女子よりも自己受容的であることを示している。すなわち、中学生の方が大学生よりも、生き方において充実し、自己卑下することなく、人間関係もよく、楽しい生活をしている。また、男子の方が女子よりも、自己卑下することなく、自信を持っているということになる。表9の第Ⅲ因子すなわち自己客観視の因子にもとづく得点をみると、有意な差はないが大学生の方が中学生よりも高い傾向がうかがえる。

表9 各因子にもとづく得点の平均、標準偏差および分散分析の結果

因子	学年・性平均標準偏差		中 学		大 学		学 生		性 差 男-女	学年差 中-大	交 互 作 用		
	M	SD	男		女		男					女	
			M	SD	M	SD	M	SD				M	SD
第Ⅰ因子	40.70	8.23	41.00	7.83	37.93	9.36	37.09	7.15		> **			
第Ⅱ因子	42.92	8.16	40.39	7.85	38.99	7.66	37.80	7.59	> *	> **			
第Ⅲ因子	22.47	3.80	22.08	4.56	22.78	3.83	22.14	3.82					
第Ⅳ因子	15.48	3.89	14.53	3.62	14.68	3.05	14.81	3.35					
第Ⅴ因子	13.61	2.82	13.53	3.08	12.47	2.70	12.50	2.32		> **			

表10 各因子にもとづく得点間の相関 (中学)

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子
第Ⅰ因子		.641	.542	.276	.694
第Ⅱ因子	.670		.275	.617	.581
第Ⅲ因子	.438	.323		-.038	.319
第Ⅳ因子	.372	.559	.170		.337
第Ⅴ因子	.724	.528	.443	.314	

(上段は女子、下段は男子)

表11 各因子にもとづく得点間の相関 (大学)

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子
第Ⅰ因子		.637	.652	.300	.664
第Ⅱ因子	.706		.430	.580	.630
第Ⅲ因子	.662	.536		.075	.330
第Ⅳ因子	.375	.514	.233		.455
第Ⅴ因子	.697	.645	.501	.395	

(上段は女子、下段は男子)

表10, 11には各因子にもとづく得点間の相関を学年別性別に示した。表10, 11によると、第Ⅲ因子すなわち自己客観視の因子と第Ⅳ因子すなわち物事にこだわらないおおらかさをあらわす因子とは相関がほとんどない。それ以外の相関はすべて1%水準で有意な相関である。したがって、因子間には相関的関係があるといえる。

5 因子と領域からみた自己受容性

これまでみたように、因子と領域とは明確な対応がみられなかった。領域とは自己を記述する側面であり、因子分析による因子とはむしろ自己受容性をあらわす諸側面であると考えられる。

そこで更に、因子と領域とを組み合わせ、自己受容性の年齢的変容の内容を明らかにするために、次のように項目を分類した。すなわち、表8において因子負荷量の絶対値が.40以上の項目をさらに各領域から分類した。ただし、(17)、(48)の項目は因子負荷量が.39であり1因子にのみ負荷が高いため、それらの項目もここでとり上げた。そして、各因子の各領域にあたる項目数が2以上のものとし、表12にその分類を示した。

表12にしたがって、項目の得点を合計し、それぞれの平均、標準偏差および分散分析の結果を示したのが表13

である。

表13によると、表5、表9の結果を更にくわしく検討することができる。第Ⅰ因子の生き方においては、中学生の方が大学生よりも自己受容的である。また、第Ⅱ因子の生き方、対人的領域、性格では、同様に中学生の方が大学生よりも自己受容的である。第Ⅱ因子の性格、身体・容姿的領域、能力的領域、および第Ⅲ因子、第Ⅳ因子の能力的領域では、男子の方が女子よりも自己受容的である。第Ⅰ因子はほぼ生き方に対応するので、学年差がドミナントであるというこれまでみてきた結果と同様である。第Ⅱ因子は自己卑下、自信の欠如の因子であるから、生き方、対人的領域、性格においての自己卑下的かどうか、あるいは自信を持っていないのかいるのかは大学生と中学生を特徴的に区分するといえよう。また、

表12 項目の分類

因子	領域	項目番号
第Ⅰ因子	生き方	1 11 16 21 31 36 41 46 49 51
	能力的領域	5 25
第Ⅱ因子	生き方	6 11 21
	対人的領域	12 27
	性格	3 33
	身体・容姿的領域	4 14 39
第Ⅲ因子	能力的領域	20 30
	性格	13 28
第Ⅳ因子	対人的領域	32 42 48
	能力的領域	30 45
第Ⅴ因子	対人的領域	7 17 22

表13 因子と領域にもとづく得点の平均と標準偏差および分散分析の結果

因子	領域	中 学		大 学		性 差 男-女	学年差 中-大	交互作用			
		平均・標準偏差		平均・標準偏差							
		男	女	男	女						
第Ⅰ因子	生き方	31.89	6.77	31.92	6.33	29.29	7.68	29.04	6.00	> **	
	能力的領域	5.73	1.56	5.86	1.46	5.97	1.40	5.43	1.27		*
第Ⅱ因子	生き方	10.83	2.50	10.49	2.40	9.59	2.72	9.50	2.31	> **	
	対人的領域	7.37	1.86	7.25	1.67	6.33	1.85	6.17	1.83	> **	
	性格	6.84	1.90	6.42	1.81	6.18	1.57	5.95	1.62	> *	> **
	身体・容姿的領域	11.13	2.35	10.28	2.46	10.73	2.17	10.32	2.46	> **	
第Ⅲ因子	能力的領域	6.75	1.90	5.95	1.97	6.16	1.71	5.84	1.56	> **	> *
	性格	6.63	1.53	6.56	1.66	6.80	1.44	6.83	1.37		
第Ⅳ因子	能力的領域	10.27	1.96	9.91	2.19	10.43	1.72	9.94	1.67	> *	
	対人的領域	9.10	2.66	8.58	2.29	8.80	1.92	8.99	2.31		
第Ⅴ因子	能力的領域	6.38	1.95	5.70	1.95	6.08	1.66	5.94	1.63	> *	
	対人的領域	10.20	2.10	10.32	2.30	9.66	2.03	9.76	1.89		> **

性格、身体・容姿的領域、能力的領域においての自己卑下的かどうか、あるいは自信が欠如しているかどうかは女子と男子の違いを特徴的に示すことになる。能力的領域においては、自己を客観視できるかどうか、あるいは能力的領域においておそれるかであるかどうか、男女の違いを示すことになるといえよう。

表12にもとづいた得点間の相関を、学年別、性別に表14、15に示した。

これによると、各因子内の領域間の相関はいずれの学年、性においても1%水準で有意である。学年、性を問わずこの点ではほぼ同様の相関である。表14、15の結果は表10、11の結果とほぼ同様である。第Ⅱ因子における

領域と第Ⅲ因子における領域との相関について、表14と表15を比べてみると、性差はほとんどみられず、学年差がむしろみられるようだ。中学の方には.20以下の相関が多いが、大学には少ない。 .20以下ではほとんど有意な相関ではない。これは特に第Ⅲ因子の性格にみられる傾向である。すなわち、性格面で自己を客観的にとらえられるかどうかということ、いろいろな領域において自尊的であり自己卑下しないということとは、中学生においては関係がうすいといえよう。ところが、大学生では、その両者は有意な関係があるといえよう。

また、能力的領域では、生き方の充実性をあらわす因子と自己客観視をあらわす因子において相関が高く、自

已卑下しているかどうかをあらわす因子とおおらかさの 因子において相関が高いことが表14、15からうかがえる。

表14 各因子，各領域にもとづく得点間の相関（中学）

因子 領域		因子		第Ⅱ因子					第Ⅲ因子		第Ⅳ因子		第Ⅴ因子
		第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	生 き 方	対 人 的 域	性 格	身 姿 的 ・ 領 容 域	能 領 力 的 域	性 格	能 領 力 的 域	対 人 的 域	能 領 力 的 域	対 人 的 域
第Ⅰ因子	生 き 方	.575	.699	.344	.571	.386	.413	.317	.419	.154	.257	.602	
	能 領 力 的 域	.465	.324	.188	.429	.240	.224	.522	.698	-.003	.130	.447	
第Ⅱ因子	生 き 方	.779	.220	.304	.591	.484	.482	.073	.190	.191	.314	.462	
	対 人 的 域	.305	.041	.384	.381	.325	.417	.079	.173	.343	.431	.287	
	性 格	.602	.260	.541	.338	.566	.567	.212	.253	.204	.426	.529	
	身 体 ・ 容 姿 的 域	.472	.125	.554	.469	.558	.551	.149	.181	.169	.427	.367	
第Ⅲ因子	能 領 力 的 域	.474	.118	.558	.453	.485	.559	.107	.164	.366	.806	.391	
	性 格	.313	.418	.195	.107	.208	.110	.098	.626	-.182	.030	.193	
第Ⅳ因子	能 領 力 的 域	.274	.356	.145	.178	.357	.256	.244	.504	-.058	.108	.290	
	対 人 的 域	.401	.213	.424	.309	.375	.392	.485	.119	.217	.418	.162	
第Ⅴ因子	能 領 力 的 域	.282	.066	.339	.275	.318	.452	.724	.028	.233	.478	.238	
	対 人 的 域	.577	.325	.391	.205	.541	.348	.357	.358	.472	.336	.289	

（上段は女子，下段は男子）

表15 各因子，各領域にもとづく得点間の相関（大学）

因子 領域		因子		第Ⅱ因子					第Ⅲ因子		第Ⅳ因子		第Ⅴ因子
		第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	生 き 方	対 人 的 域	性 格	身 姿 的 ・ 領 容 域	能 領 力 的 域	性 格	能 領 力 的 域	対 人 的 域	能 領 力 的 域	対 人 的 域
第Ⅰ因子	生 き 方	.634	.806	.348	.472	.411	.391	.528	.419	.227	.260	.543	
	能 領 力 的 域	.703	.444	.280	.327	.183	.196	.596	.565	.070	.140	.261	
第Ⅱ因子	生 き 方	.815	.504	.368	.615	.501	.579	.357	.238	.230	.410	.550	
	対 人 的 域	.453	.261	.421	.506	.401	.490	.260	.331	.187	.363	.309	
	性 格	.649	.397	.651	.581	.480	.630	.240	.230	.418	.495	.493	
	身 体 ・ 容 姿 的 域	.327	.117	.369	.425	.519	.500	.337	.187	.227	.343	.356	
第Ⅲ因子	能 領 力 的 域	.412	.215	.554	.489	.486	.330	.151	.179	.370	.778	.288	
	性 格	.528	.641	.400	.242	.494	.253	.170	.618	.066	.041	.197	
第Ⅳ因子	能 領 力 的 域	.364	.448	.309	.283	.380	.245	.226	.542	.009	-.042	.243	
	対 人 的 域	.326	.278	.276	.269	.266	.040	.178	.271	.110	.450	.335	
第Ⅴ因子	能 領 力 的 域	.203	.049	.330	.331	.246	.153	.773	.007	.101	.255	.258	
	対 人 的 域	.619	.414	.610	.490	.547	.274	.374	.311	.205	.322	.265	

（上段は女子，下段は男子）

Ⅲ 討 論

本研究では領域から自己受容性をまずとらえようとして、領域とSAIの因子的構造との対応をみた。しかし、領域と因子にはほとんど対応がみられなかった。自己受容性の年齢的変容の内容を明らかにするには、領域の自己受容性をとらえていくことが必要であると考えていた

が、必ずしもそれだけでは充分でないといえよう。本研究においては、個人が自分をどのような面からみているかという意味において領域は設定された。Shavelsonらのいうself-descriptionという意味である。ところが、因子分析の結果による因子はむしろ自己受容性の内包的側面を示していると考えられる。すなわち、先に引用したRosenbergの「self-imageのいかなる部分」にあたる

のが「領域」であり、「いかなる変化」にあたると思われるのが「自己受容性」の変化であろう。そして、その変化をとらえようとするに際しては、自己受容性を一元的にとらえるか、因子的構造からとらえるか、あるいは更に別の構造的なとらえ方をするかということがあるように思われる。本研究の因子分析の結果を解釈すると、各因子は自己受容性の内包的側面をあらわしているように思われる。すなわち、自己受容性は生き方の充実性、自己卑下的でなく自尊的であること、自己客観視、物事にこせこせしないおおらかさ、および人との信頼関係の中で楽しい生活をしているという側面から考えられるであろう。

要約するなら、自己のどんな側面についてどんな受容の仕方をしているのかという2点から、自己受容性をおさえていくことが必要といえよう。

そこで、self-descriptionという意味からの領域と自己受容性の内包的側面をあらわすと考えられる因子とから、SAIの項目を分類して検討した。それが「5 因子と領域からみた自己受容性」における結果である。

さて、中学生と大学生との比較から得られた結果についてみると、年齢段階によっては、自己のある領域について受容し、ある領域については受容していないということが示唆される。つまり、全般的な自己受容性の変容がみられるのではなく、ある領域についての自己受容性の変容すると考えられる。特に、自己の生き方いわば生活態度、人間関係や自己の性格といった領域について、自己卑下的になったり、あるいは自信を失っていくようである。ところが、自己の能力や才能といった面や身体や容貌といった面については、本研究の結果からみれば、ほとんど自己受容性は変容していない。また、表6表7および表10、表11からみると、領域間の相関および因子間の相関はかなり高いが、表14、表15に示されている因子と領域とから自己受容性の得点間の相関をみると相関の低いものがかかなり認められる。したがって、自己受容性の年齢的変容の内容をさぐっていくうえで、北村の考察は有効であろうと思われる。

今後は、自己を記述する各領域に対する青年の関心や個人にとってどのような意味をもっているかという「心理的意味」について、中学生と大学生或いは高校生も加えて比較し、本研究において得られた結果の背景を明らかにしていく必要があるだろう。中学生では、特に身体的成熟も著しく、性的発達にともなって異性への関心も高まると考えられる。また、学校教育が試験(テスト)によって重められているなかで、中学生にとっては、そのテストの結果である成績の良し悪しにかなりの関心を寄せているであろう。中学生の関心が高いと考えられる

このような身体・容姿の領域と能力的領域において、中学生と大学生の自己受容性に違いのみられなかったことは、それらの領域に対する関心や重要性といった心理的意味が更に検討されなければならないことを意味しているであろう。

中学から高校そして大学とすすむにつれ、個人の生活空間は拡がり、個人はより複雑で多くの人間関係をもつようになる。そして、その中で多くの経験をし、大学生はより自己を客観的に厳しくとらえようとするのであろう。また、自由度の大きい生活をするのでできる大学生になって、自己をより深く、諸領域においてとらえようと試みるのであろう。一方、現代社会にあっては、試験中心の学校社会の中で、ほとんど真剣に自己の問題をとり上げる環境を、中学生は持ちえないのかもしれない。「今日の青年においては、大学に入って初めて、自我の確立あるいは自己の解放が、青年期の課題として本格的に登場してくる」という野呂(1973)の考察に示されるとおりであろう。更に検討していかなければならない。

<謝辞>

本研究をまとめるにあたり、御指導いただいた名古屋大学教育学部久世敏雄教授はじめ諸先生方に深く感謝の意を表わします。また、項目の判定を御願ひした皆様、快く調査を引き受けてくださった中学校および大学の先生方、そして生徒・学生諸君に厚く感謝します。

文 献

- Achenbach, T. & Zigler, E. 1963 Social competence and self-image disparity in psychiatric and non psychiatric patients. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 197-205.
- Berger, E. M. 1952 The relation between expressed acceptance of self and the expressed acceptance of others. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 778-782.
- Bills, R. E., Vance, E. L. & McLean, O. S. 1951 An index of adjustment and values. *Journal of Consulting Psychology*, 15, 257-261.
- Carlson, R. 1965 Stability and change in the adolescent's self-image. *Child Development*, 36, 659-666.
- Combs, A.W. & Snygg, D. 1949 *Individual Behavior*. New York: Harper.
- Crowne, D. P. & Stephens, M.W. 1961 Self-acceptance and self-evaluative behavior: A

- critique of methodology. *Psychological Bulletin*, **58**, 104-121.
- Crowne, D. P., Stephens, M. W. & Kelly, R. 1961 The validity and equivalence of tests of self-acceptance. *Journal of Psychology*, **51**, 101-112.
- Engel, M. 1959 The stability of the self-concept in adolescence. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **58**, 211-215.
- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and Society* (2nd ed.). New York: Norton.
- Gough, H. G. 1960 The adjective check list as a personality assessment research technique. *Psychological Reports*, **6**, 107-122.
- Gough, H. G. & Heilbrum, A. B. 1965 *The adjective check list manual*, Palo Alto, Calif: Consulting Psychologists Press.
- Jersild, A. T., Brook, J. S. & Brook, D. W. 1978 *The Psychology of Adolescence* (3th ed.). New York: Macmillan.
- Jorgensen, E. C. & Howell, R.J. 1969 Changes in self, ideal-self correlations from ages 8 through 18. *Journal of Social Psychology*, **79**, 63-67.
- 加藤隆勝 1960 自己意識の分析による適応の研究 心研, **31**, 53 - 63.
- 加藤隆勝 1962 青年期における自己受容と自己批判の年齢的変容について 岐阜大学学芸学部研究報告 (人文科学), **11**, 83 - 89.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ, **14**.
- Katz, P. & Zigler, E. 1967 Self-image disparity: A developmental approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **5**, 186-195.
- 川岸弘枝 1972 自己受容と他者受容に関する研究—受容測度の検討を中心として 教心研, **20**, 170—177.
- 菊池登紀子 1970 青年期における自己観〔1〕—私立女子校生における発達の様相 岩手大学教育学部研究年報, **30**, 57 - 74.
- 北村晴朗 1977 自我の心理 (新版) 誠信書房
- McCandless, B. R. & Evans, E. D. 1973 *Children and Youth: Psychosocial Development*. Illinois: Dryden Press.
- Monge, R. H. 1973 Developmental trends in factors of adolescent self-concept. *Developmental Psychology*, **8**, 382-392.
- Mullener, N. & Laird, J. D. 1971 Some developmental changes in the organization of self-evaluations. *Developmental Psychology*, **5**, 233-236.
- 野呂 正 1973 自我の形成 宮川知彰編「青年の性格形成」(現代青年心理学講座4) 金子書房 83—133
- 小山田隆明 1971 セルフ・イメージの発達的研究(序報) 岐阜大学研究報告(人文科学), **20**, 88—96.
- Pedersen, D. M. 1969 Evaluation of self and others and some personality correlaters. *Journal of Psychology*, **71**, 225-244.
- Phillips, E. L. 1951 Attitudes toward self and others: A brief questionnaire report. *Journal of Consulting Psychology*, **15**, 79-81.
- Raimy, V. C. 1948 The self-reference in counseling interviews. *Journal of Consulting Psychology*, **12**, 153-163.
- Rasmussen, J. E. 1964 Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Report*, **15**, 815-825.
- Rogers, C. R. 1949 A coordinated research in psychotherapy, a non-objective introduction. *Journal of Consulting Psychology*, **15**, 79-81.
- Rogers, C. R. 1968 The significance of the self-regarding attitudes and perceptions. In Gordon, C. & Gergen, K. J. (Eds), *The Self in Social Interaction*. New York: John Wiley & Sons, 435-441.
- Rogers, C. & Dymond, R. 1954 *Psychotherapy and Personality Change*. Chicago: University of Chicago press.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the Adolescent Self Image*. Princeton, N.J.: Princeton University press.
- Shavelson, R. J., Hubner, J. J. & Stanton, G.C. 1976 Self-concept: Validation of construct interpretations. *Review of Educational Research*, **46**, 407-441.
- Sheerer, E. T. 1949 An analysis of the relationship between acceptance of and respect for self and acceptance of and respect for others in ten counseling cases. *Journal of Consulting Psychology*, **13**, 169-175.
- Spitzer, S. P., Stratton, J. R., Fitzgerald, J. D. & Mach, B. K. 1966 Test equivalence and perceived validity. *Sociological Quarterly*, **7**,

- 265-280.
- Spivack, S. S. 1956 A study of a method of appraising self-acceptance and self-rejection. *Journal of Genetic Psychology*, **88**, 183-202.
- Spranger, E. 1955 *Psychologie des Jugendalters*. (24th ed.). Heidelberg: Quelle & Meyer.
(原田茂訳 1973 青年の心理 協同出版)
- 高垣忠一郎 1974 TST にあらわれた反応の心理的負荷について 京都大学教育学部紀要, **20**, 207-227.
- Wattenberg, W. W. & Clifford, C. 1964 Relations of self-concept to beginning achievement in reading. *Child Development*, **35**, 461-467.
- Wylie, R. 1961 *The Self Concept: A critical survey of pertinent research literature*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Wylie, R. 1974 *The Self Concept* (rev. ed.). Lincoln: University of Nebraska Press.
- 山田良一 1974 青年期における自己概念の研究 (序報) - 手記の分析による - 山梨大学教育学部研究報告, **25**, 180 - 188.
- 山根真理 1972 自己像のずれに関する発達的研究 広島女子大学家政学部紀要, **7**, 19 - 28.
- 吉川房枝 1960 青年期における自我の形成 教心研, **8**, 26 - 37. (1978年7月31日受稿)

A STUDY OF SELF-ACCEPTANCE IN ADOLESCENCE

Shuji MIYAZAWA

The purpose of this study was to demonstrate age differences in self-acceptance in terms of self-description. In order to find out age differences in adolescence, Self-Acceptance Inventory (SAI) consisted of five self-descriptive areas was devised. These areas were attitude toward life, interpersonal relationship, character, personal appearance, and ability.

102 statements on self-acceptance were judged by some psychological researchers whether each of the statements was to measure self-acceptance. On the basis of their judgements, the SAI of 51 items was administered to two age group subjects in winter of 1977. Ss were 161 males and 118 females in junior high school, 90 males and 109 females in college, respectively. They rated the SAI in form of five-point rating scale.

Reliabilities of the SAI were estimated on the split-half for the four groups divided by age and sex. As the result, the SAI was reliable.

At first, the analysis of variance of sex(2) × age(2) was carried out for each item. Age difference was found out in most of the items on attitude toward life and character. Sex difference was found out on ability. Next, it was found that five factors on the basis of factor analysis did not correspond to the self-descriptive areas. Rather, these factors were interpreted as the connotative aspects of self-acceptance. And so, the items of SAI were divided into some groups according to the contents of factors and areas. And each score of item groups in junior high school students was compared with that in college students.

In the areas of attitude toward life, interpersonal relationship and character, the levels of confidence in college were lower than those in junior high school. In the areas of character, personal appearance, and ability, the levels of confidence in the female were lower than those in the male. And in the area of ability, the males had more objective views of themselves than the females did.